

# 被葬者は誰？ 陶器片は語る

## 仁徳天皇皇后の磐之

### 奈良・ウワナベ古墳

昨秋に発掘調査が行われ、墳丘の長さが全国12位の規模であることが分かった奈良市の前方後円墳「ウワナベ古墳」（5世紀前半）。巨大前方後円墳が集まる古墳群としては国内屈指の佐紀古墳群にあり、天皇や皇族の墓の可能性がある「陵墓参考地」とされるが、そこに眠る被葬者は特定できていない。こうした中、調査で見つかった1点の土器片から、平安時代には仁徳天皇の皇后・磐之媛の陵墓として管理されていたとの説が浮上している。

（川西健士郎）

調査は昨年10・11月に宮内庁と奈良県立橿原考古学研究所、奈良市が実施。普段は水がたまっている周濠（堀）の水位を下げ、築造時の墳丘を調べた。

その結果、後円部の直径が確定し、墳丘は全長270・280メートルと判明。佐紀古墳群では、全長267メートルの五社神古墳が最大と考えられてきたが、それを超える規模となった。

奈良市は後円部東側の発掘調査を担当。そこである「発見」があった。築造時に墳丘を覆っていた葺石近くから、想定外の土器片が

①ウワナベ古墳の墳丘で見つかった平安時代の灰釉陶器片（奈良市埋蔵文化財調査センター提供）  
②佐紀古墳群で最大の大きさで判明したウワナベ古墳

（本社へりから）





# ひめ 媛か

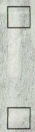


1つ見つかったのだ。

「おかしい。明らかに古墳時代の土器ではない」。調査を担当した同市埋蔵文化財調査センター主事の村瀬さんは首をかしげた。

土器は、築造から約4000年後の平安初期の灰釉陶器の壺片だった。

村瀬さんは「墳丘は手入れがされなければすぐに土砂が堆積し、草木が生い茂る。灰釉陶器の出土状況は、葺石が露出した築造時の墳丘が、9世紀まで維持されていたことを示す」と説明。磐之媛の墓と伝承され、その時代まで維持管理が行き届いていたとみる。



磐之媛は古墳時代に葛城山麓の奈良県御所市周辺を拠点とした豪族、葛城氏の全盛時代を象徴する女性だ。

父の葛城襲津彦は5世紀初めごろ、軍事や外交で活躍した英雄で、朝鮮半島の渡来系工人を葛城地方に連れ帰り、国力の発展につな

げた。仁徳天皇と磐之媛の息子3人は天皇に即位している。

平安中期に成立した「延喜式」に朝廷が管理すべき陵墓の一覧があるが、磐之媛が埋葬されているとされる「平城坂上墓」は、佐紀古墳群の東側にある3基（コナベ古墳、ウワナベ古墳、ヒシャゲ古墳）のいずれかに該当すると考えられている。

現在、宮内庁はヒシャゲ古墳（5世紀後半）を磐之媛の陵墓として管理している。だが、村瀬さんは「古墳群最大で、後世まで維持管理されていたウワナベ古墳こそ、平城坂上墓にふさわしいのではないか」と推定する。

樞考研の坂靖企画学芸部長は、ウワナベ古墳に付随する陪塚（小さな墓）の大型和6号墳から、鉄製品素材となる鉄鋌（鉄板）が872枚も出土していることに注目する。「鉄鋌は日本列島と朝鮮半島との交渉のなかで、渡来系工人の仲介で流通した。ウワナベ古墳の被葬者が朝鮮半島との交渉に深いかかわりをもっていったことは疑いない」とした上で、「磐之媛を被葬者と考えることは、あながち無謀ではない」と話す。



古事記や日本書紀によると、当時の天皇には何人もの后がいたが、磐之媛（古事記の表記は『石之日売』）は、他の后が天皇に近づくと足をばたつかせ、嫉妬するので、后たちは宮中に近づけなかったとい

う。

仁徳天皇は、磐之媛が紀州の熊野に旅行していた不在中を見計らい、いとこの八田皇女を難波宮（大阪市の宮中に召す。これを知った磐之媛は怒って難波宮に帰らず、淀川をさかのぼり、山背河（京都府南部の木津川）を南下。那羅山（奈良県と京都府の境をなす丘陵）から葛城を望み、こんな歌を詠んだ。

《我が見が欲し国は 葛城高宮 我家のあたり》  
望郷の思いが募った磐之媛は、恋しく思って連れ戻そうと画策する仁徳天皇を突き放し、再び会うことはなかった。

磐之媛は筒城宮（京都府京田辺市）で一生を終え、那羅山に葬られたと日本書紀は記す。佐紀古墳群も那羅山の一部だ。ウワナベ古墳周辺からは葛城の山々が一望でき、磐之媛にまつわる説話をほろりさせる。